

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18255

研究課題名（和文）東アフリカ農村地域における経済格差に注目した生存基盤の再考に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Reconsideration of Subsistence Focusing on Economic Disparity in Rural East Africa

研究代表者

泉 直亮（Izumi, Naoaki）

弘前大学・人文社会科学部・助教

研究者番号：60749802

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、タンザニアにおける現地調査の結果から以下の成果を得た。第一に、農村地域の世帯調査から経済格差の状況を把握し、それが人びとの主たる生業の種類、すなわち牧畜主体か農業主体かという基準で分析した。第二に、富農と小農の雇用関係や土地の売買の調査から、農村内に生じた階層的な変化を明らかにした。第三に、富豪の牧畜世帯が拡大あるいは縮小する社会的なしくみを明らかにした。人びとは、従来の牧畜社会の家族制度の規範にもとづき、一定の世帯に富と労働力を集中させていた。第四に、生業と食生活の調査から、牧畜世帯の大規模な移住を支える要因を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アフリカ農村では、従来は平等的な規範にもとづいて格差を是正し、経済的成長よりも生存維持を重視する社会が形成されてきた。しかし近年、グローバル市場の影響がアフリカ諸国にも影響を与えており、経済格差の拡大が懸念されている。それにも関わらず、当該地域を対象とした研究は、依然として地域住民を一様に「小農」とみなすか、あるいは小農のみを研究対象としてきた。本研究では企業家的な農民に関する従来の研究を発展させ、経済的に裕福な富農に注目して東アフリカ農村社会をとらえなおし、経済格差の視点を組み込んで当該地域の生存基盤を再考した。

研究成果の概要（英文）：This study obtained the following results from field research in Tanzania. First, the economic disparity was determined from a survey of households in rural areas and analyzed on the basis of the type of people's main livelihood, i.e., whether they are pastoralists or agriculturalists. Second, a survey of employment relationships and land sales between rich and small farmers revealed the hierarchical changes that occurred within rural villages. Third, this study identified the social mechanisms by which wealthy pastoral households expand or reduce. The people concentrated their wealth and labor in certain households based on the family system norms of the traditional pastoral societies. Fourth, the research of subsistence and dietary habits revealed the factors that support the large-scale migration of the pastoral households.

研究分野：地域研究

キーワード：アフリカ タンザニア 農村 牧畜 農村 経済格差 富の蓄積 家族

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

東アフリカ農村では、従来は平等的な規範にもとづいて格差を是正し、経済的成長よりも生存維持を重視する社会が形成されてきた。しかし近年、新自由主義的思想にもとづいたグローバル市場の影響が、アフリカ諸国にも影響を与えている(池野 2010)。それにともない、農村地域も急激に変容しており、経済格差の拡大が懸念されている(掛谷・伊谷 2011)。それにも関わらず当該地域を対象とした研究は、依然として地域住民を一様に「小農」とみなすか、あるいは小農のみを研究対象としてきた点で問題がある(Oya 2008)。本研究の代表者は、東アフリカ農村におけるこれまでの調査から、近年になって企業家的な大規模生産をおこなう「豪農」の出現を明らかにしている(泉 2016)。

そうした大規模な「豪農」世帯が従事する生業の代表例がウシ牧畜である(Izumi 2017)。1990年代以降、急速に市場経済が普及し、国内の隅々まで家畜や農作物の流通網が拡大した。これを受けて、多くのウシを飼養してきた牧畜民のなかには、市場で大きな利益を得るものが現れている。また、機械化や化学肥料、除草剤の使用に代表される近代的な農業が普及していない地域において、ウシは牛耕や施肥などに利用する点で農耕生産の拡大にとっても重要な役割を果たしている。こうした状況を受けて、ウシを中心に多くの家畜を所有する牧畜系の人びとと、家畜をあまり持たない人びとのあいだの格差が顕著になったのである。

2. 研究の目的

本研究ではこのような研究背景を踏まえて、東アフリカ、とくにタンザニアの農村変容とその持続的な発展を主題として、牧畜社会の置かれた現代的な状況を踏まえつつ、牧畜民と近隣農耕民との関係について明らかにする。とくに、経済的に裕福な富農に注目して東アフリカ農村社会をとらえなおし、経済格差の視点を組み込んで当該地域の生存基盤を再考することを目的とする。

より具体的には、以下の5点から上記の課題にアプローチする。第一に、農村の世帯調査から生業の特徴にもとづいた農村内部の経済格差の状況を把握する。第二に、高い移動性によって国内各地の未利用地に進出してきた牧畜社会の特質について、生業と食生活との関係から理解する。第三に、農村内での経済格差の拡大を把握したうえで、それに起因する社会構造の変容、すなわち階層化の進行について明らかにする。第四に、上記の格差拡大に関連して、農村内での土地権売買と農業を中心とする生業の状況を把握することで、自給の基盤すらも不十分な世帯が増加している懸念について議論する。第五に、牧畜世帯にとっての財と家族の関係に着目して、富農世帯を維持、形成する社会的なしくみについて明らかにする。そして、農村の富者としての牧畜民という視点を踏まえて、農村社会の経済格差と人びとの共存、そしてその共存を支える社会的な関係について考察する。

3. 研究の方法

本研究では、主要な調査方法として現地での参与観察調査を実施した。対象地域に居住し、牧畜民と農耕民といった住民と生活や活動をともにするなかで得られた記録である。質的調査としては、人びととの会話、半構造化インタビューから得られた聞き取りに加え、できごと(事例)の観察結果を記録した。また、量的調査としては、人数、ウシの頭数、作物の収量、土地の面積、家計状況などを計測、測算した。

調査対象は、タンザニアの牧畜民と農耕民の人びとである。調査地は、タンザニア南西部のルクワ平原(ルクワ湖畔)であり、牧畜系住民のおもな移住先のひとつである。行政区分としては、ルクワ州スンバワンガ県に位置している。現地調査の期間は、2018年8月~9月、2023年8月~10月までの計89日間である。

4. 研究成果

研究期間全体としては、タンザニア連合共和国における現地調査の結果から以下の成果を得た。第一に、農村地域の世帯調査から経済格差の状況を把握し、それが人びとの主たる生業の種類、すなわち牧畜主体か農業主体かという基準で分析したことである(泉 2021)。とくにウシとコメの市場流通網の普及と需要の増大により、両者の生産を拡大できる潜在力を有していた人びとが経済的には有利になる基盤が醸成されていたことを明らかにした。ウシ牧畜に従事していた人びとは、そのウシを利用した牛耕によって稲作を中心とした農作物生産も拡大できるという相乗効果により、生産性を拡大していた。さらに、ウシ牧畜と連動した家族システムにより、生産の単位である世帯の人数も大規模化していた。

第二に、生業と食生活の調査から、牧畜世帯の大規模な移住を支える要因を明らかにした(泉 2024)。この人びとは、おもに1980年代以降にこの地域に移住してきたが、大規模な移住を支えた要因について生業面での適応という観点から明らかにした。おもな要因として、まずウシやヤギのミルクといった畜産物に依存できたことや肥料や犁耕作といった点で家畜を利用できたことが挙げられる。つぎに、移住先の環境に応じてモロコシ、トウモロコシ、イネ、サツマイモな

どを栽培できる農業技術の多様性である。それは、上記の主食の穀物類にはこだわらずにその地域で栽培できるものを食用にするという、食生活の柔軟性にも支えられている。

第三に、富農と小農の雇用関係や土地の売買の調査から、農村内に生じた階層的な変化を明らかにした(泉 2021、泉 2023)。多くの地域住民はトウモロコシやイネの栽培、ウシやヤギの牧畜を基盤として食料自給の面では生存基盤を確保する一方で、市場経済の浸透にもなって現金需要が増大し、それとともに格差が拡大していることも確認された。大規模な生産活動を展開する牧畜世帯が、家畜をあまり持たない小農世帯を雇用する状況から、雇用関係が拡大している。

第四に、住民間で土地の売買が進行していることを明らかにした(泉 2021)。1999年に制定された村落土地法(施行は2001年)に影響から、従来は親族集団や集落ごとに管理されてきた土地の権利が、地方住民間で個人的に売買されるようになっていた。その結果、一部の住民が現金獲得に必要な農地を失っており、地元住民である農耕民系の人びとについては約50%の世帯が富裕層に雇われて生計を維持する状況である。さらに、そのうち約25%の世帯は自給のために必要な土地を失っており、農民の土地なし化、農業プロレタリアート化が進行していることが懸念される。

第五に、牧畜世帯にとっての財と家族の関係、とくに富豪の牧畜世帯が拡大あるいは縮小する社会的なしくみを明らかにした(泉 2019a、泉 2019b、泉 2023)。人びとは、従来の牧畜社会の家族制度の規範にもとづき、一定の世帯に富と労働力を集中させていた。従来は、新古典派経済学的な理念を牧畜社会にも当てはめて、自己の利益を最大限にするために行動する個人主義な人間像を想定して現地社会を解釈し、現地の格差を自由競争の結果であるとする解釈がされていた。しかし、本研究の現地調査は、このような解釈に最高を求める結果を提示した。すなわち、この牧畜社会は「富がある世帯に人が集中する」という規範にもとづいており、本研究は大規模世帯がつくられる社会的なしくみを明らかにしたのである。また、家族メンバーの交渉によって、こうした大規模世帯が維持されることも明らかにした。

参考文献

- 池野旬(2010)『アフリカ農村と貧困削減：タンザニア 開発と遭遇する地域』京都大学学術出版会。
- 泉直亮(2016)「富者として農村に生きる牧畜民：タンザニア・ルクワ湖畔におけるスクマとワングダの共存」重田眞義・伊谷樹一(共編)『争わないための生業実践：生態資源と人びとの関わり』京都大学学術出版会、pp.19-49。
- 泉直亮(2019a)「大富豪」世帯の維持：スクマ社会における父と息子の葛藤」太田至・曾我亨(共編)『遊牧の思想：人類学がみる激動のアフリカ』昭和堂、pp.327-350。
- 泉直亮(2019b)「タンザニア・農牧民スクマの「大富豪」世帯を形成する社会的なしくみ」『生態人類学会ニュースレター』25: 20-23。
- 泉直亮(2021)「農村地域における土地権の売買と格差の拡大：タンザニア南西部・ルクワ湖畔地域の事例から」『生態人類学会ニュースレター』27:56-60。
- 泉直亮(2023)「富の蓄積と再生産：東アフリカ農牧社会における財と家族」杉村和彦・鶴田格・末原達郎(共編)『アフリカから農を問い直す』京都大学学術出版会、pp.255-286。
- 泉直亮(2024)「農牧民の移住と生業・食事との関係：タンザニア・スクマ社会の事例」生態人類学会第29回研究大会。(2024年3月27-28日、於・福井県あわら市)
- Izumi, N., (2017) “Agro-Pastoral Large-Scale Farmers in East Africa: A Case Study of Migration and Economic Changes of the Sukuma in Tanzania.” *Journal of Nilo-Ethiopian Studies* 22: 55-66.
- Oya, C., (2007) “Stories of Rural Accumulation in Africa: Trajectories and Transitions among Rural Capitalists in Senegal,” *Journal of Agrarian Change* 7(4): 453-493.
- 掛谷誠・伊谷樹一(2011)「アフリカ型農村開発の諸相：地域研究と開発実践の架橋」掛谷誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会、pp.465-509。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 泉直亮	4. 巻 27
2. 論文標題 農村地域における土地権の売買と格差の拡大：タンザニア南西部・ルクワ湖畔地域の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生態人類学会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 56-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 泉直亮	4. 巻 16
2. 論文標題 フィールドワークの技術をどう身につけるか：「観光・まちづくり」の視点を育むワーク型授業の事例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人と教育：目白大学高等教育研究所所報	6. 最初と最後の頁 33-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 泉直亮	4. 巻 34
2. 論文標題 世界農業遺産の活用についての展望：徳島県における「にし阿波の傾斜地農耕システム」の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第34回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 321-325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 泉直亮	4. 巻 25
2. 論文標題 タンザニア・農牧民スクマの「大富豪」世帯を形成する社会的なしくみ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生態人類学会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 泉直亮
2. 発表標題 農牧民の移住と生業・食事との関係：タンザニア・スクマ社会の事例
3. 学会等名 生態人類学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 泉直亮
2. 発表標題 タンザニア・スクマの牛耕：ウシの「やさしい」扱い方
3. 学会等名 生態人類学会第28会研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 泉直亮
2. 発表標題 農村地域における土地権の売買と格差の拡大：タンザニア南西部・ルクワ湖畔地域の事例から
3. 学会等名 生態人類学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 泉直亮
2. 発表標題 東アフリカ牧畜社会における財の蓄積と家族：富豪世帯を形成する社会的なしくみとその意義
3. 学会等名 アフリカ農業革命研究会（研究代表者：鶴田 格）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 泉直亮
2. 発表標題 世界農業遺産の活用についての展望：徳島県における「にし阿波の傾斜地農耕システム」の事例から
3. 学会等名 日本観光研究学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉直亮
2. 発表標題 タンザニア農村における土地権の売買：経済格差に注目して
3. 学会等名 日本アフリカ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉直亮
2. 発表標題 タンザニア・農牧民スクマの「大富豪」世帯を形成する社会的なしくみ
3. 学会等名 生態人類学第24回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 杉村 和彦、鶴田 格、末原 達郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 478
3. 書名 アフリカから農を問い直す	

1. 著者名 太田至・曾我亨（共編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 400
3. 書名 遊牧の思想：人類学がみる激動のアフリカ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------